

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：34419

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19H02335

研究課題名（和文）近代東アジアにおける都市基盤及び住宅地の形成と再編に関する実証的研究

研究課題名（英文）An Empirical Study of the Formation and Reorganization of Urban Infrastructure and Residential Districts in modern East Asian Cities

研究代表者

奥富 利幸（Okutomi, Toshiyuki）

近畿大学・建築学部・教授

研究者番号：70342467

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,000,000円

研究成果の概要（和文）：近代に開発された大規模住宅地の現地調査は、2019～2023年度に中国の大連、北京、上海、韓国のソウル、日本の東京と大阪にて実施した。そして、住宅を実測し、多言語文献の収集を行った。これらの調査データによって、住宅地計画、住戸プラン、住民構成、生活様式について歴史的検証ができた。そして、東アジア全体の住宅地を俯瞰的な視点からの検証を可能とするために、東アジア住宅年表を作成して、日本、中国、韓国の比較検証を行った。その上で、3回に渡って、国際シンポジウムを主催して、本研究分野の専門家を招集して、東アジア住宅地の形成を多視点から検討した。今後、東アジア近代住宅通史の構築に向けた礎となる成果を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2013年に日本で都市史学会が創立されたことで、細分化されていた専門分野を統合する新潮流を導いた。そして、2018年6月には、日本、中国、韓国の研究者により、ソウルにて「東アジア都市史学会」が創立された。まさに「東アジア」を都市史学の一つの地域単位と見なす前兆とも受け取れる。本研究は、このような当時の学術的新動向と呼応する先端的研究課題であり、近代東アジアの都市空間の変遷を全貌的に把握するという開拓性がある。

研究成果の概要（英文）：In 2019, 2022, and 2023, we have done the fieldwork surveys of the large-scale residential areas developed in modern times as planned in Dalian, Beijing, and Shanghai in China, Seoul in South Korea, and Tokyo and Osaka in Japan. We have measured the houses and collected multilingual documents. Then we conduct a historical examination of residential area plans, housing unit plans, population composition, and lifestyles. In order to make a bird's-eye view of residential areas development of East Asia, we created an East Asian Housing Chronology and conducted a comparative examination of Japan, China, and South Korea. Furthermore, we hosted three international symposiums that have examined the formation of East Asian residential areas from multiple perspectives. In the future, we would like to move forward with the construction of a comprehensive history of modern housing in East Asia.

研究分野：建築学

キーワード：東アジア 住宅地 都市計画 都市開発 都市基盤 ガーデンシティ モダニズム 住宅改良運動

1. 研究開始当初の背景

東アジアの近代都市が直面した移民、多人種の混住、多宗教信仰の同居と交錯、多国籍企業の協働と競争などの諸問題及び様々な社会集団や住民構成により形成された都市内部構造の複雑さは、現代のグローバル化されつつある世界の都市が、今後直面しなければならない問題でもある。本研究は、近代に都市基盤を築いていた中国の上海、広州、大連、北京、日本の東京、大阪、韓国のソウルを研究対象にして、都市社会の変動がより見えやすい都市住宅地とそれを支える都市基盤を調査対象にし、空間的な実態を把握すると同時に、これまでに見落とされてきた都市コミュニティによる住民構成、世界規模の人口移動（ロシア人の上海移住、日本人の旧満洲・韓国移住、華僑の韓国・日本移住と海外移住先からの帰国、多国籍技術者の東アジア地域での活躍など）と都市用地計画、開発モデル（機能単一型・複合型）と都市空間類型との関連性に注目して、研究を遂行した。東アジアを都市史学、建築史学の一つの地域単位と見なす新しい視点で研究を試みた。

2. 研究の目的

本研究では、近代東アジアの都市空間の変遷を全貌的に把握するため、建築空間の物理的な実態を実証的に把握するのみならず、欧米人や日本人、韓国人、華僑たちの広域的な移住による東アジア近代化へのインパクトを明らかにした。近代化の過程において都市住民の主導性を見出すことは、中国、韓国における近代的建造物を植民地支配の象徴という負のイメージから脱却することを促進する。これまでに受動的に再利用されてきた近代都市基盤と住宅地を今後の都市発展の上で、インフラストラクチャーとしての社会福祉向上及び都市アイデンティティ構築に対し、積極的に再編を促す試みを提案することが目的である。

本研究では、元々関連性の強い都市基盤と住宅地開発を一体化して捉えるという特徴がある。具体的には、住宅建築の内部空間や団地計画のみならず、住宅地と一体化して開発された公共建築（学校、病院、図書館、デパートなど）及び都市インフラ（電気、水道、ガス、バス・電車などの公共交通）も考察対象に加えることで、都市社会の全貌を鳥瞰的に把握した。

3. 研究の方法

東アジアの近代都市・建築のあり方の全貌を把握するため、異なる都市類型の代表例として（南から）広州、上海、大連、ソウルと当時の開発モデルとして参照され、関係性が強い東京、大阪を研究対象にする。

既往研究により、広州は中国の国民政府が、主導的に近代化を進めた都市群の代表例であるという特徴を把握している。これまでに、1920年代以降では、アメリカ留学経験者の中国人政治家や技術者たちが、国民国家を建設する理想をもち、広州に都市計画及び田園都市理論を持ち込んだ歴史的経緯までわかったが、本研究では、まだ未着手の都市基盤の建設や住宅地開発の実態を現地調査した。また、広州にある大学の専門家と共同調査して、これまでの研究の空白であった華僑資本の都市開発の影響力について、現地での文献調査や実測調査を行った。

東アジアの近代租界都市の典型例として、上海を研究対象にした。特に住宅地建設に関わる英語のオリジナル資料群を利用して、フランス租界に形成された住宅地の現地調査と文献での検証を行った。

日本植民都市の事例として、大連とソウルを研究対象にした。両者は同じ類型に属しながら、両者の同異点を比較する。特に大連は、「満洲の田園都市」及び満洲のモダン都市として、都市インフラと住宅地をシステムの的に開発したモデルで、その由来を明らかにした。同時に、華商資本は、広州、上海、大連、ソウルの全てに影響を持ったが、それが都市空間にいかなる特性を与えたのかを解明する。また、各都市が受けた国際的な影響を解明するため、田園都市論や近隣住区の都市計画思想について、各都市の事例ごとに検証した。

以上の通り、本研究対象を都市基盤と住宅地にしたことは、従来の細分化された専門領域により、分断的に都市事象を分析する弊害を克服するためである。これまで、都市基盤は土木・都市工学に、住宅地は建築史・意匠と別々の専門分野に分割して、研究されてきた。そこで、本研究では、元々関連性の強い都市基盤と住宅地開発を一体化して捉え、都市社会の全貌を鳥瞰的に把握して、目的を達成した。そのため、コロナ禍の影響により、実施できなかった年度以外では、3年間連続で、研究代表者、分担者及び海外協力者、当分野の専門家を招集して、国際シンポジウムを主催し、研究成果の統合を図った。

4. 研究成果

本研究では、実証的な研究姿勢を重視して、フィールドワークに基づく研究データの収集に努めた。具体的には、中国では、北京、大連、上海、広州にて近代に開発された大規模住宅地を現地調査し、住宅の実測、コミュニティの沿革、住民構成及び生活様式についてインタビューを行ない、多言語文献の収集ができた。

北京では、ソ連の援助で建設された北京の百万庄住宅地の配棟計画や構造形式について確認

すると共に住民へのヒアリング調査を実施して、計画の理念とそれに基づく居住実態の比較検証を行った。大連では、満洲における田園都市論の受容過程のうち、1920年 - 1930年に建設された満鉄社員の「大連共栄住宅組合」と大連郊外の田園住宅地を事例として、それぞれの住宅地計画、住棟形式、住戸構成などを現地調査して、取り壊す直前の住宅を実測できたことなど大きな成果を得た。広州では、華僑が都市住宅地建設に与えた影響を明らかにした点は、本研究で得た大きな成果の一つである。つまり、1954年に計画された華僑新村は、海外から帰国した華僑たちのための住宅地であるが、同都市のほかの住宅地でソ連由来の大居住区計画が実施された中、華僑新村のみは、戸建住宅をメインとする住宅地で計画、建設された。加えて、本研究では、華僑新村における田園都市論やモダニズムの影響を明らかにした。上海では、「花園新村（ガーデンビレッジ）」の事例について、住宅の敷地形態、住宅空間構成、住宅地の住民構成までを明らかにした。また、コロナ禍のため、現地の研究協力者に協力を仰ぎ、上海長楽村の建築実測調査を実施した。具体的には、長楽村の建築実測調査、住民インタビュー、歴史資料調査をした。その成果物は、住宅地周辺環境図、敷地配置図、建築平面図、断面図、立面図を作成して、現状生活状況や家族構成などは、聞き取り調査票による調査を行った。

これまでの既往研究は、租界における外国人資本の開発事例が殆どであったが、本研究では華商資本による都市開発を研究対象にしたことが特徴である。その事例として、四川北路沿いの1930年代に中国の不動産会社が開発した里弄住宅地を調査した。この住宅地は、現在、歴史的建築群に指定されている。ここでは、住宅地の配棟構成や敷地内通路の構成と使用実態と住宅内の仕様を確認の上、住民のヒアリング調査を実施し、住宅の使われ方と間取りを検証した。

研究期間の前半では、1940年代までの戦前の住宅地形成について重点に置いたが、後半では1950年代以降の社会主義期の住宅地の建設と再編を重点にした。上海では、前川国男建築事務所が1940年代にデザインした上海華興商業銀行綜合社宅区を現地調査したが、コロナ禍前までに遺存していた住宅棟は全て解体され、現在は新しいマンションが建設されていることを確認した。

韓国ソウルでは、永登浦新市街地で朝鮮住宅営団が計画建設した道林町モデル住宅団地と鐘紡紡績の工場社宅村を研究協力者と検証した。

研究期間の過半を占める2020年度から2022年度には、コロナ禍の影響により、調査対象地を変更しながら研究を遂行した。東アジア全体の住宅地を俯瞰的な視点から検証を可能とするために、研究分担者による東アジア住宅年表を作成した。また、本研究の国際的な発信を図るため、研究代表者及び研究分担者が執筆した論考を日本語から英語に翻訳し、公刊した。

なお、研究期間中には、3回の国際シンポジウムを開催して、研究成果の共有と研究の目的を達成するための議論がなされた。2020年2月には、本研究チームの国内外の研究者を招集し、「東アジア住宅地計画及び開発におけるモダニズム・ガーデンシティ思想の影響に関する研究」国際シンポジウム(The International Symposium “Studies on the influence of modernization and garden city movement in East Asian residential planning and developing”)を開催して、20世紀以降の東アジア住宅地建設の実態を中国、韓国、日本の研究者により明らかにし、また、ロシアにおけるガーデンシティ思想の受容と伝播についてロシア人の研究者によって明らかにした。2023年3月には、「東アジア近代住宅地の「理想像」を探る」国際シンポジウムを共催し、近代アジア建築史、植民地都市研究をリードする日本、韓国、中国、ロシアの研究者が参加して、近代住宅地における田園都市思想の導入及び住まいの理想像について深く討議した。発表のテーマは、「建築的アンサンブル」の思想とロシア帝国における建築イデオロギー、ソ連の住宅地の都市的デザイン及びマスタープランモデルの革新、“新村”: 新中国における広州の住宅地建設と空間の生産、1920 - 1940年代まで京城に於ける郊外住地と田園住宅地について、北進の暖房史(1905-1957)旧満洲から長野県野辺山開拓へなどが発表され、討議が行われた。最後に、2024年3月には、本研究チームと共同研究者による「東アジア近代住宅地の共通性と多様性」国際シンポジウム(「The Commonalities and Diversity of Modern Residential Areas in East Asia」)を開催した。日本、中国、韓国の共同研究者を招聘し、20世紀初めにおける華僑の不動産投資と居住建築の改良、冷戦下のマレーシアの華人村「新村 New Village」と中国広州に出現した東南アジア華僑住宅地との比較、1910~1940年代の日中住宅地に関する比較研究、ハノイに残る北朝鮮の組立式集合住宅、日本毛織加古川工場社宅建築群、20世紀初めの韓国木浦における住居の変化などについて、発表、討議を行った。

以上の研究活動と成果により、多視角に東アジアの住宅地形成を検討し、従来の植民と被植民の視点から脱却して、各地の能動的な近代化を都市ごとに明らかにし、東アジアの近代住宅地通史を構築する基盤を築く成果が得られたと言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 包慕萍, 奥富利幸	4. 巻 4
2. 論文標題 From the Viewpoint of Hygiene to analyze the Architecture and Urban Facilities of Modern Dalian	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 City and Public Health : Urban History and Medical Humanities	6. 最初と最後の頁 97-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 包慕萍, 高村雅彦	4. 巻 4
2. 論文標題 Japanese architects' devising of healthy housing in Manchuria	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 City and Public Health : Urban History and Medical Humanities	6. 最初と最後の頁 117-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 奥富 利幸, 包 慕萍	4. 巻 2
2. 論文標題 From Zeami Densho to Shomei : A Study of Noh Performance Space from the Perspective of Scale Systems	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 建築史学刊	6. 最初と最後の頁 39-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 包慕萍	4. 巻 176
2. 論文標題 The Practice of Modernist Apartment House in Northeast China: The Designs of Japanese Architects in Dalian, Anshan and Fushun Between the 1910s and 1930s	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 時代建築	6. 最初と最後の頁 27-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 包慕萍、奥富利幸	4. 巻 2021
2. 論文標題 From the Viewpoint of Hygiene to analyze the Architecture and Urban Facilities of Modern Dalian	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 City and Public Health : Urban History and Medical Humanities	6. 最初と最後の頁 97-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 包慕萍、奥富利幸、徐 学敏、曾 楠	4. 巻 2021
2. 論文標題 寧波保国寺大殿の意匠における天台浄土教との関連に関する考察 海域交流の視点からみた東アジア建築史研究 その1	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本建築学会大会梗概集	6. 最初と最後の頁 171-172
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 包 慕萍、高村雅彦	4. 巻 2
2. 論文標題 近代における居住環境改良思想の満鉄社宅標準設計への影響	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東アジア都市史学会論文集	6. 最初と最後の頁 122-124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 奥富 利幸	4. 巻 2
2. 論文標題 都市における能楽堂移転の敷地選択に関する考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東アジア都市史学会論文集	6. 最初と最後の頁 117-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 包 慕萍	4. 巻 2019
2. 論文標題 大連沙河口からみる初期の満鉄標準住宅	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 1003-1004
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 包 慕萍	4. 巻 9
2. 論文標題 Architecture and Urban Facilities in Modern Dalian, from the Point of View of Sanitation	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大和大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 7-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 姜 広博、包 慕萍、宇野 朋子、山田 協太	4. 巻 2022
2. 論文標題 Simulation of the Microclimate Generated in the Siheyuan of Qing Dynasty Beijing Based on an Historically Verified Model : Towards clarification of the climate responsive mechanisms of vernacular architecture	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 799-802
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 包 慕萍	4. 巻 31
2. 論文標題 吉阪隆正のパノラマ世界：生活スケールから地球へYOSIZAKA TAKAMASA Panorama World:from life-size to the earth	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『建築歴史研究 Journal of Architectural History』韓国建築歴史学会87	6. 最初と最後の頁 87-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 包慕萍、大場修	4. 巻 10
2. 論文標題 Residential Planning for a South Manchurian Railway (SMR) Colliery Town : Xintun, Fushun, China	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 大和大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 7-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 包慕萍、奥富利幸、森湧梧他	4. 巻 2023
2. 論文標題 満鉄社宅の採暖防寒技術と室内の和風化について 東アジアにおける住宅地形成に関する研究 その1	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 11-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 包慕萍、奥富利幸、橋口登偉他	4. 巻 2023
2. 論文標題 衛生の観点から見た近代大連の都市インフラ計画と建築法規 東アジアにおける住宅地形成に関する研究 その2	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 13-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大塚光太郎、包慕萍、林憲吾	4. 巻 2023
2. 論文標題 満洲における暖房技術の利用実態と長野県野辺山開拓地での反復 東アジアにおける住宅地形成に関する研究 その3	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 15-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森恭彰、奥富利幸、高村雅彦、包慕萍他	4. 巻 2024
2. 論文標題 1920～40年代の大連郊外田園住宅地の形成に関する研究 東アジアにおける住宅地形成に関する研究 その4	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 谷川竜一
2. 発表標題 19世紀末朝鮮における日本公使館の変遷と居留地の形成 日本人たちはいかにして「京城」に住み始めたか
3. 学会等名 神奈川大学非文字資料研究センター 租界・居留地班 第74回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 奥富利幸
2. 発表標題 衛生の観点から見た近代大連の建築と都市施設
3. 学会等名 第4回東アジア都市史学会大会 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 包慕萍、高村雅彦
2. 発表標題 満鉄社宅の採暖防寒技術の向上による和室の導入について
3. 学会等名 建築史学会2019年度大会研究発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 包慕萍
2. 発表標題 満洲における建築雑誌の体系と特徴
3. 学会等名 韓国漢陽大学建築学部主催「東アジア建築歴史文化国際シンポジウム」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 包慕萍	4. 発行年 2020年
2. 出版社 同済大学出版社	5. 総ページ数 181
3. 書名 時代建築Time+Architecture	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	谷川 竜一 (TANIGAWA RYUICHI) (10396913)	金沢大学・新学術創成研究機構・准教授 (13301)	
研究分担者	包 慕萍 (BAO MUPING) (40536827)	大和大学・理工学部・教授 (34453)	
研究分担者	岡村 健太郎 (OKAMURA KENTARO) (50737088)	近畿大学・建築学部・准教授 (34419)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	林 憲吾 (HAYASHI KENGO) (60548288)	東京大学・生産技術研究所・准教授 (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計4件

国際研究集会 通史的と通時的な東アジア住宅地形成研究会	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 「東アジア住宅地計画及び開発におけるモダニズム・ガーデンシティ思想の影響に関する研究」研究会	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 東アジア近代住宅地の理想像を探る	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 東アジア近代住宅地の共通性と多様性	開催年 2024年～2024年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------